

点訳通信

122号

日本ライトハウス情報文化センター
点字製作係

発行責任者 久保田 文

〒550-0002 大阪市西区江戸堀 1-13-2-8F
Tel 06-6441-1028(点字製作係直通)

先日、西区の「第18回そよかぜまつり」会場で点字体験のお手伝いをしました。小学校低学年以下の子もいて、初めて触る点字盤に苦戦していましたが、自分の名前を真剣に打ってくれていました。これをきっかけに点字に親しんでくれたら嬉しいです。

情文では、年明けから講習会修了者がボランティア活動に加われます。それぞれの得意分野を生かしつつ、さまざまなジャンルの点訳にチャレンジしていただければと願っています。(点字製作係 木田陽子)



休館等のお知らせ



1月 6日 (月)	職員仕事始め
1月 7日 (火)	ボランティア活動再開
2月11日 (火・祝)	建国記念の日のため休館
3月20日 (木)	春分の日のため休館



※ 1月11日(土)、2月22日(土)は開室いたします。



(C) WANPUG

新たなメンバーが活動に参加します

12月10日(火)に点訳ボランティア養成講習会を修了された6の方が、1月から各チームに分かれて活動を開始されます。皆さんどうぞよろしく願いいたします。

火曜日 岡村 恵太 (おかむら けいた)、木田 博美 (きだ ひろみ)、白石 ゆかり (しらいし ゆかり)

水曜日 北川 敏 (きたがわ さとし)、森下 佳苗 (もりした かなえ)

土曜日 酒井 文子 (さかい ふみこ)

*敬称略

写真説明の書き方

点訳している書籍に写真が掲載されている場合、原本にキャプション（紹介文）が添えられていれば、その内容を点訳します。

加えて、本文の内容やキャプションのみでは写真の内容を理解しづらい場合は、点訳者が補足をします。

補足する際のポイントとして、

- ・大まかに写真全体の説明をしてから、細部の情報を伝える
- ・写真から読み取れる情報のうち、本文に関係する内容を説明する
- ・できるだけ簡潔に説明する

などが挙げられます。

写真説明をどこに挿入するかも重要なポイントです。なるべく本文の内容に近いところに挿入するのが望ましいです。かといって、途中で文章を分断して入れてしまうと、かえって本文が中断してしまい読みにくいものになる可能性もあります。

関連する話題が終了する区切り目、見出しのまとまりごとに入れるなど、写真説明の挿入個所は慎重に検討する必要があります。

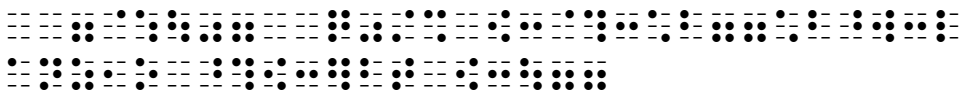
写真説明のレイアウトについて決まったルールはありませんが、最近の当館の点訳方法として、以下が考えられます。

<写真が1枚の場合>



点訳講習会

◇◇（写真）◇◇点訳講習会（（会場に集まった受講生と講師））



<写真が2枚の場合>



点訳講習会

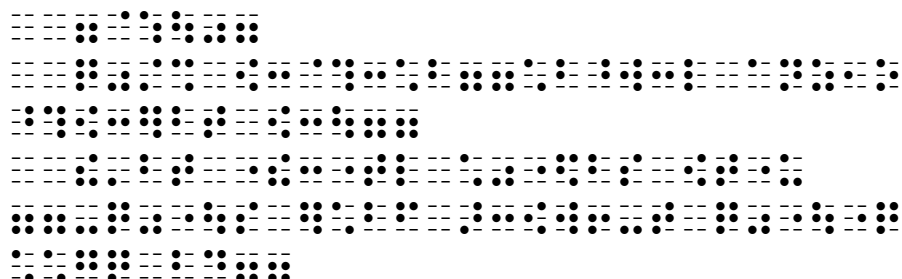


ホワイトボードに歓迎の言葉

◇◇ (写真)

◇◇点訳講習会 ((会場に集まった受講生と講師))

◇◇ホワイトボードに歓迎の言葉 ((「点字の世界へようこそ！」と点字で書かれている))



※なお、「(写真)」のところに「(写真説明)」と書いて、キャプションや説明を記載する方法もあります。

触図学習の期待と課題

来年2025年はフランスで点字が考案されてから200年になります。様々な団体が参画し活動している点字考案200年記念事業推進委員会では、その記念すべき年に先駆けて、点字の未来について考えるイベントを企画してきました。第4回目は、日本点字の制定日、11月1日に合わせて「日本における点字普及の課題を考える」をテーマに、シンポジウムを開催しました。会場はサイトワールドが行われた東京都墨田産業会館会議室。午前のシンポジウムには100名ほどの方が参加され、触図をテーマに興味深い3人の講師の発表と意見交換が繰り広げられました。

まず、大内進氏(手と目でみる教材ライブラリー・星美学園日伊総合研究所客員研究員)から、触る教材には2次元(図)、2.5次元(半立体)、3次元(立体)があり、利用者の学習段階に応じてそれらの資料を使い分ける必要性を定義されました。また、図や立体模型資料だけでは不完全で、言葉(文字)による補足も重要であること、点図において触知可能な線の高さ、B5サイズの点字用紙に留まらず大きい用紙を使用した作成の取り組みも必要ではないかとふれられました。

次に、長岡英司氏(日本点字図書館理事長)から、これまでに開発・普及されてきた国内の触図作成用具や機器類の紹介、日本点字図書館でこれまで製作された貴重な点図資料の報告などお話しいただきました。そして、今後、点図作成をする専門的な人材が確保されなくてはならないこと、触図の素材の開発、さらに点図を読むための端末や点図プリンタといった機器類の推進が必須であると述べられました。

最後に、キム・テス(金台守)氏(Dot Inc. 日本担当)から、韓国の自社で開発された点図ディスプレイ「Dot Pad」の紹介とともに、開発・普及に至った経緯が紹介されました。ドットパッドは、点字だけでなく点図も表示できるB5サイズのピンディスプレイです。PDFデータ等の画像を変換して浮き立たせることができる他、ピンディスプレイに接続したiPadの画面に指で線をなぞると瞬時にピンディスプレイに浮き立たせることもでき、会場

を沸かせていました。今後、学校の授業や公共の場で使用されるマップなどに活用できるのではないかと検討されているそうです。

私たちが必要とする資料がますますビジュアル化されている中で、言葉による説明だけではなく点図表現への期待度も同時に高まっていると思います。用具・機器類の開発なしに前進することはあり得ませんが、合わせて、触図ないしは触覚資料を製作する人材を養成すること、また点図資料の素材や製作方法などを検討することが両輪で取り組まれなくてはならないと、このシンポジウムを通じて強く感じました。そして、今後の可能性への期待を大きくした次第です。

「マンガ点訳勉強会」報告

11月7日（木）に「マンガ点訳勉強会」を行い、19名が参加されました。当日の様子を川嶋職員にレポートしてもらいます。

* * *

11月7日、当館主催の漫画点訳勉強会に参加しました。

まず、漫画の要素をどれだけ生かして点訳するかというテーマで講義がありました。漫画というのは絵を中心に視覚に訴える作品ですから、全てが文字情報である点字で表すことは非常に難しいです。そのため、絵の中にあるセリフなども活用しながら視覚情報を補い、世界観を壊さずに伝えることが大切であると学びました。

その後、いくつかのイラストや漫画を見ながらどう点訳するかを考え、皆で話し合いました。

当日配られた例題の中に、「ウサギが工事の音を怖がる」という場面がありました。漫画のコマの中には「ゴゴー」とか「ドドド」といった擬音が書かれています。点訳例では「ゴゴー ドドド（(外で工事の音がしている。))」のように、擬音に続けて点訳者が説明文を入れていました。

次に、「クッキングシートを三角形に折り先端を切り取って落とし蓋を作る」という描写では、多くの参加者が紙を折りながら考え、「折った時の形を説明してはどうか」、「先端を切り取る長さを示してはどうか」等、活発な意見交換が行われました。

セリフなどを活用しながら、状況や登場人物の動作を説明する文章を加えて点訳することで臨場感が増し、読者はより楽しむことができます。また、点訳者には描かれたものを客観的にそして簡潔に伝える力が求められると感じました。その他、セリフの前には登場人物の名前を書くこと、説明文を書くときは「楽しい」「悲しい」「寂しい」のような形容詞は避けて、感情移入したものにならないようにする等の心得を学んで終了しました。

点字使用者の私にとって漫画は想像が難しく、どこか遠い存在でした。周りが漫画の話で盛り上がる中、疎外感を感じていたのを思い出します。しかしこれだけ多くの方が漫画点訳に熱意を持ってくださっていることがわかりましたので、何か1冊、手に取ってみたいと感じました。

今や世界中で人気の日本の「漫画」。この素晴らしい文化が、視覚障害者の世界をさらに豊かにしてくれることを願います。

